

初期の誘導保育の実際

ここに再録する二篇の实例は、本誌にもっとも古くあらわれた初期の誘導保育の实例である。大正七年、大正十四年という古い時期のものであるが、新しい試みの意欲にあふれたものであり、現代の読者にも参考になると思うので再掲載することとした。

動物園あそびの記（大正七年）

とよ子

鳥や獸の標本がその丸い眼を見張ったきり、昨日も今日もおなじようにガラス戸棚の中に立ち並んでいる。あれを利用して動物園を作ったらとの説が出て、さて作ろうとはしたが標本だけでは余りに殺風景である。余りに単調である。子供は象が好きである。

獅子も好きである。水族館も親しいものである。どうかしてこれらも作りたいものである。切符や入場券を売る事の好きな人に入場券売りもさせて見たい。入口も賑わしく飾って見たい。子供ら

の小さき弟妹が見物に來た時に動物園みやげもやりたいと、考えはその場所にと充てられた遊戯室の隅から隅へ、壁から壁へと次第に広がって行く。次第に濃くなって行く。とうとう象、獅子、虎、熊、駝鳥の五つは壁画で補うこととした。それでその五つと入口左右の壁裏表に貼るための森四枚とを教生（本校四年生にて実施保育練習生）にたのんで画いってもらう事にした。頼まれた人々は紙を何枚も何枚も継いで部屋一ぱいに広げて画き始めた。殆

んど実物大の象を描こうという。なかなか大変な事である。その輪廓をとるだけでも大変である。大きな刷毛で思い切り大きく書いていく。細かい所が分らなくなればわざわざ動物園に見に行く。かくまでして一生懸命に画いた。その尊き本真剣な努力。子供は之を見た。実に之を見た。単に絵の進行のみを見たのではなかった。「象はまだかなあ」と毎日の様に待ち遠しがられながら、象は一日一日と形と色とを成して行った。「僕は早く象が切りたいなあ、まだかなあ」と、とんでもない時に鉄を握って待ち詫びた子供もあった。愈々象が出来上ったとなると、その喜びは一通りでない。「象が出来ましたよ」と言えば、見たさ、切りたさに、何もかも捨てて慌て出した。やがて遊戯室に広くごさが敷かれ、その上に象が広げられた。「やや大きいなあ」「先生切らせて下さい」「僕、鼻つと」「僕あたまつと」「僕脚つと」「僕背中つと」各自が欲する所を申し出して、鉄を握ってすわった。先生に更に範囲をきめてもらって、各自切り始めた。何れもベストをつくそうと鈴の様な眼を見張って夢中になって切っている。すわっているもの、足を出しているもの、腹ばいになっているもの、そのどりの姿に力がこもる。大きな象を小さな人が八人がかりでまるで象に吸い込まれた様になって切っている。何という尊い光景である。やがて七、八分したかと思う頃象は紙から抜け出した。子供も夢中、大人も夢中、壁に掲げて見なければ承知出来ない。取

りあえず、仮に正面の壁に掲げられた。先生はこの時、子供がどんなに喜んだか、それを見、それを喜ぶ余裕もなく、自分が先づ象につり込まれてしまった。象は左に右に上に下に動かされ、なかなか位置が定まらぬ。四肢の下の方は柵にかくれて見えないことにするはずであった象は、とうとう絵画きの先生に継ぎ脚をせられ、床迄引き降ろされて、先生も象も初めて落付いた。長い鼻には一握りのわらがまき上げられ、本当の象の様な気がした。象はかくして遂に出来上った。ほんとうに生きている様に出来上った。駝鳥、獅子も、虎も熊も同じ様にして作られた。虎の脚の趾を切り殺いだとて泣き真似遊びをしている子供の群もあった。獅子、虎、熊には紙製の檻も添えられたので、すっかり動物園らしくなった。

これらの騒ぎの中で、お土産用の風車を作った人も多かった。赤や紫や緑の紙で風車を作り、それに「ドウブツエンミヤゲ」と覚束なげに、しかし全力を挙げて子供が書いた小さな紙の札が附けられた。そして出来上った沢山の風車は目が醒む様に美しく籠に盛られた。二籠も。

入場券も子供が作った。幅二寸、長さ三寸位の紙に猫の型紙を貼りつけ「入ジョウケン」と、これも子供が書いた。

此日は土曜日であった為、子供を早くかえさなければならぬ。仕方なしに十一時半頃にかえした。あさつてを楽しみに待たせて。

きて午後になってから、先生は月曜日をまぢかねて、とうとう総出になって動物園を作り始めた。ありったけの標本は運ばれ清く塵は払われた。大きな鳥と獣は壁画の森を背景に卓子の上に並べられ、各の間は積木でしきられた。水禽類は中央の池に泳がせられた。池は略円形に水色の紙を敷き周囲は長き腰掛で囲み、真中に大積木の箱（約九寸立法）六個を以て積まれた水禽の家を作り、其中には粟を敷き、四方には積木で段々を積み、屋も又積木で作った。標本の水禽に比べてはいかにも小さい家でありながら、それでも少しも不調和に見え無かったのも不思議である。池の片隅には庭から拾って来た小さい樋で作られた餌流しもあった。餌入れには生きた鱒も入れられた。禽の標本は其脚の下について居る台がいかに殺風景に見えるので、これは水になっていて紙の切れ目をこしらえて、其の下へうまく隠した。禽はあたかも人待ち顔に静かな水を遊いでいる様に見える。

次は水族館作りである。岩、海草、章魚、鳥賊いろいろの魚は画用紙に書かれ、切り抜かれ、水色に採色せられた大きな紙に糊付けにせられた。これがやがて三つの窓の硝子へ外から貼り付けられた。硝子を通して見るという趣向が之についての工夫であった。単に水族館を見るだけでは物足りないということになって、丁度他の部屋に作ってあった魚釣場をここへ移すことにした。それには水族館の一隅を三角形にかこんで、其中に水色の紙を敷

き、石炭利用の岩、実物の栄螺などを配置して海が出来上ったのである。其の海に玩具や手製の魚が沢山遊いでいる。その魚の一つ一つには口に針金の小さい環が附けられている。釣針を此の口にひっかけて釣らせようのである。海岸には細竹で作った釣竿十数本と、釣り上げた魚を入れる為の籠とが準備されて、その傍に、これも子供の書いた「ドナタデモオツクリクダサイ」という札が掲げられた。気がついて見れば短き冬の日は此時西に傾きかけていた。先生達は小鳥の配置と、入口の装飾とをあさってに残して、一先ず引き上げた。三分の二出来上った動物園の夕間に大きな象が一層ほんものらしく浮き上って居るのを自分ながら感心しながら。

月曜日の朝早くから入口の装飾に取りかかった。予て子供と一緒に作って置いた半紙大の国旗七、八十枚を繋いで入口の中央から左右にかけ渡した。赤い日の丸は背景の森に映えて一段と美しく輝いた。そして、動物園開園日の楽しい気分をぐっと引き立てた。入口の柱には「お茶の水どうぶつえん」と、子供の字の力の籠った達筆なこと。

次の仕事は小鳥の配置である。いろいろ工夫した末に、グララドピアノの上に毛布二枚、濃い緑の蚊帳三張を使って小山を作った。そして所々に盆栽と、ほんものの笹とをあしらった。其小山の上に、小山の上の木々の枝に、可愛い小鳥はそれぞれ其の性に

合う様な適當の姿勢に配置せられた。歌って居る様なものもある。

餌をあさって居る様なものもある。これでまあやつのことに動物園が完成せられた。床は清く拭われ、いかにも気持よく整頓せられた。園内の動物はどれも朝の空気に生々している様に見える。

やがて動物園の開園という段になる。子供は先生と一緒に見物に來た。「入口」と書いた左側から入って左へと廻った。無言で驚きの眼を張っている鳥、鷲、雉、鶉、梟、鷹と順々に見て部屋を曲れば水族館である。好きな章魚もいる。きれいな珊瑚もある。鯛も比良目もとびうおも水母も遊んでいる。列を作った沢山の可愛い目がいかに珍らしそうに窓硝子製水族館を覗いて廻る。次には魚釣場である。此所は又一層の面白さである。これだけは上野の動物園にもない新装置である。小さい釣手は代る代る魚を釣る。容易にはかからない。其の代り釣れた時の嬉しさは本当の魚を釣った様な得意な顔をして竿を上げて居る。又角を曲ると熊、虎、獅子、それから駝鳥がいる。駝鳥の他はしつかり檻に入れられているので流石の猛獣も怖ろしくない。ここは男の子の大評判。「先生、動物園がおしまいになったら僕に虎と獅子とを下さい」「僕に駝鳥と熊とを下さい。」と先生にねだった小さい熱心家もあった。之等を見終ると次は小鳥の山である。鳩、雀、雲雀、鶯、ソグミ、セキレイ、ヒヨドリ、燕、鶉等十六、七羽もが

楽しそうに群っている。ここには女の子が大勢「可愛いのねえ」といいながら立止っている。次が象である。象大王である。小さい人達は其の前になると一層小さく見える。その小さい来観者が首を上下に動かして頻りに見上げ見下ろしている。何ととっても子供の一番好きな象である。動物園中最傑作の家である。男の子も女の子も、ここに集ったきり動かないのも無理はない。其傍に用意せられてあつた餌皿の塩煎餅はいつの間にか象に投げられていた。猿の餌のお芋や胡蘿蔔までも、鳩の豆までも大変な人気である。

此所で遊び足りた次は、栗鼠、兎、狸、猿である。猿は手や足に胡蘿蔔とお芋とを持たせられていた。兎の背中をそつと撫でて見る子供もあった。斯う順々に見て来ておしまいが中央の水禽の池になる鴨、鶯、鴛鴦、鶯、鶉、雁、などが悠々と遊んでいる。子供は池の周圍に置かれた腰掛に縋つて池を覗き込んで居る。「生きた鱈がいる」とふれ歩いている人もあつた。実際に餌を流させる事の出来なかつたのは残念であつた。餌待ち顔に樋の傍に立つて居る鶯や鴨を見た時は實際大人でも一寸餌を流して見たい様な気がした。

こうして静かに丁寧に一巡した後、其後は勝手に思い思いに幾度も見物を繰り返した。本当の動物園に來た様な気分がして居るらしかった。其中に絵の好きな子は此所で動物の写生を始めた。

小さい板の上に紙を載せ、所々のベンチに腰をかけて好きなものを写生していた。一番多く写生されたのは家で、駝鳥、虎、兎、猿、鷲もなかなか人気を集めていた。又或る日は此所で遊戯や唱歌もした。山の奥のピアノから色々の唱歌が響いてくるのも言うに言われぬ面白さであった。蛙になってお池の中を跳んだり、海岸に行つては海の歌をうたつたり、小山の前に並んでは鳩、鶯、雀、雲雀などの唱歌をうたい、又遊戯をした。或る日は又腰かけて象のお話も聞いた。それがどんなに珍らしく面白かつたらう。唱いなれた歌も遊びなれた遊戯もいつもとは違つた新しいものになった。

開園の翌日には本校、附属高等女学校、附属小学校等に動物園案内が掲示せられた。やがて動物園にも、廊下にも大きな足音や小さい足音が賑わしくなつた。中には小学校の団体見物もあつた。子供のお母さんや小さき弟妹の影も見え出した。幼稚園は恰もお祭り、しかも大祭りの様な賑かさであつた。おみやげの風車はすぐに無くなつて幾度も幾度も作り足された。他所の幼稚園の小さい方々も先生に連れられて、わざわざ此動物園へ遊びにいらした。そのお客さんからは自ら採集せられた沢山の種子や、五年前に挿木にしたのが今は立派に花の咲いた柳の大きな枝などをお土産に戴いた。何という美しい尊いお土産であらう。動物園へ植物園から贈物などと言つて喜んだ人もあつた。時間は短かつた

が、それでも楽しそうに遊んで頂いて、子供も大人も象も、水母も。此珍らしいお客様をどんなにか悦んだ事であらう。

かくして二月四日から九日まで、全園何れも動物園の人となつて遊びくらしした。最後の日、この楽しかつた遊びを偲ぶよすがにもと、象を始めあれやこれやと写真にとつて、わが大動物園は静かに閉じられた。

森といつしよに大事に巻いて仕舞われた。象よ、虎よ、獅子よ、さきくあれ。またの日まで。さらば。

此の動物園の保育上の意義

一、幼児の喜び楽しむこと。

二、幼稚園生活の或は単調に流れ易きに対する適當の変化。

三、動物剥製標本の幼児教育的使用の一法。

四、幼稚園においては幼児をして製作作業せしむるのみならず、教育者自身が興味を以て一生懸命製作する処のものを（此動物園は保母先生の工夫努力になる）幼児をして之も熱心に見せしむるも亦保育上天に価値あり。之れ此動物園の準備設置の間に於て著しく立証せらし事なり。

五、獅子、虎等、の諸動物、殊に象の如き大動物の切りぬきは幼児の作業として雄大なること。（此諸動物は幼児をして共同的に切りぬかしめたり。象の如きは約七人にて五、六分を要し、幼児の最も喜べる処なり。）

六、此の動物園は当校内一般の観覧を案内し、又幼児の弟妹等の米観を迎えたり、自分達の愉快とする処のものを多勢の人の賞観に供するということは、幼児達に快調にして社交的なる一種の祭典的喜悦を経験せしむるに於て頗るよき機会となれり。

七、幼児をして此の動物園に写生を試みしめ、又之に關する談話及遊戲を試みしめ平日の描き方話し方遊戲等の場合と殊れる結果を得しは、初の計画に思い設けざりし一種の利用法なりき。

婦人と子供 第十八卷 大正七年 第三号 110~118頁

八百屋遊び (大正十四年)

及川ふみ

今日は朝から雨で、内あそびにはよい日であります。この間か

に売り台の上にならべました。見ると

らみんなが一生懸命にしてこしらえたお野菜(これは画用紙に野菜をかき、それをきりぬいたものであります)が硯箱のふた一杯にたまってあります。早速茶色の紙で小さい丸を沢山うちぬいてお金をこしらえました。そこで

いちご、なつみかん、ばなな、りんご、めろん、すいか、だいこん、にんじん、はす、かぶ、たけのこ、きうり、なす、さやえんどう、そらまめ、とまと等

「今日は八百屋さん遊びをしましょう」

というと、大よろこびで五、六人の子供達は物置へはしりこみましました。そして自分達の背よりも高い衝立をわいしょわいしょとお部屋へかつぎこみました。これが彼等の一つの愉快な遊びとなり

みどりやあかや、黄色の色とりどりも奇麗でありますし、又一つ一つの形もなかなか上手であります。下手な大人のかいたのよりもよっぽど味のあるものばかりであります。尚、ならばきらな

ました。四、五人の女の児は八百屋さんになりたいので、衝立の中にはいりました。そして野菜の箱からいろいろよりわけて奇麗

いお野菜は箱の中に沢山のこつていて商品はなかなか豊富にあります。銀行屋さんになる男の幼児たちも又せつせと別の衝立を物置からかついできて、八百屋さんの反対の側へ店を出しました。そし